

今泉吉晴さん

(動物学者・翻訳家)

自然に関わり、生きるという日々をなぜゼロとシートンを読むのか(上)

東日本震災は、天災・人災の両面で深刻な被害をもたらした。二度と同じことを繰り返さないためにも、いまこそ自然と文明社会との調和が求められる。一年のほとんどもを岩手県北上山の山小屋で暮らす動物学者・今泉吉晴さんに、「自然との共生の知恵」について聞いた。

自然とかけ離れた人間の悲劇

——震災から一年が経ちましたが、どんなことを感じておられますか。

震災の日、私は岩手県の北上山地にある山小屋にいました。小屋がすごい音を立てて激しく揺れたのですが、物が落ち、水が止まった程度ですみました。でも隣の人、といっても山の中なので視界には入らないお隣さんですが、その方は買い物に出た先で被災しています。

震災直後は特に、津波に襲われたところと襲われずにすんだところのコントラストがすごかった。津波は気仙川沿いに十キロ上流まで上がってきました。私の山小屋がある住田町の役場は、そこから五キロほどのところでした。

地元では、被災を証言・検証する五分番組「あの日あの時」が、平日は毎日放映されていますし(NHK盛岡放送局制作)、また身近なところからも、いろいろな話を聞きます。しかし、人類と生物種の生存を脅かす最悪の事態が原発事故であることは明らかです。

——津波を見に行つて巻き込まれてしまった人も、ず

いぶんいたそうですね。

悲劇というほかありませんね。津波に対して、おどろくほど無防備でした。学者や行政が、巨大な防波堤や原発をつくるために、理論でとりつくりつた安全を売りものにしたことが大きいと思います。それが地震の歴史を忘れさせ、注意をおこたることに通じました。その一方で、地震や津波に関心を持ち続け、起こった震災にも見通しを持てた人は勇敢でした。押し寄せ

る津波を泳いで渡つて、孤立した人を助けた人さえいます。

私が注目しているのは、津波にのまれてしまった人の生死を分けたのが、とっさの反射力であることです。強い流れからなんとか身を守った人の話を聞くと、反射的にフェンスにつかまったり、魚網をつかんだりしている。人は木から落ちそうになると反射的に木をつかみますが、それと同じです。近くで流される人を助けるときには手で引っ張り、走つて逃げるときには手を取り合う。このように手は動物的な反射力を発揮し、命を救う最後の手段として大いに役立ちました。

人間がとっさのときにどれだけ自己防衛の本能を発揮して反射的に動けるか。今回の震災では、手による「とっさの反射的行動」のほかに、命を救った反射的行動がたくさん見られたはず。数々の証言が、それを物語っていました。

しかし、原発事故による放射性物質の拡散には、最後の反射能力も無力でした。人間には放射能を感知する能力はありませんから、どこが安全なのかがわからず、逃げようがありません。感覚能力を生かせず、政府の避難指示の言いなりになるしかなかったわけです。



●いまいずみ・よしはる 一九四〇年東京都生まれ。東京農工大学農学部卒業。都留文科大学名誉教授。『ムササビ』で日本科学読物賞、『シートン』子どもに愛されたナチュラリスト』で児童福祉文化賞、小学館児童出版文化賞を受賞。主な訳書に『シートン動物誌(全12巻、紀伊國屋書店)、ソロー「ワールデン 森の生活」(小学館)などがある。